ウサギと共に暮らす日々のできごとから学ぶ　その 3

－ホームステイの語りから－

光村智香子 [1)]・鍋島　惠美 [1)]

Case Study of Raising Rabbits in a Kindergarten Setting Ⅲ
― “Reports from Host Families” ―

Chikako MITSUMURA and Emi NABESHIMA

抄録：2007 年度に誕生した 1 羽の子ウサギの飼育は，当時の担任に引き継がれ，今も担任するこどもと共に飼育が継続されている。その日々の中で，ウサギの飼育にまつわるこどもとウサギの物語（ストーリー）が今も生まれている。そのストーリーは,「1．ハイ（子ウサギの名前）との出会い, 2．かかわりはじめる，3．一緒にいる・仲間のハイ」という展開をする。そのなかで，こどもが①家庭から幼稚園へと居場所や安心感を得ていく過程，②一緒にいることから仲間になっていく過程が見て取れる（鍋島他，2010）。さらに，③保育者の飼育する姿勢が保護者の育児支援になること，幼児期に飼育した経験が，④小学校就学後に書き言葉を覚えたこどものいきいきした表現を引き出すことや、彼らの不安定な心を癒す（ハイに会いたい）ことも分かった（光村他，2010）。さらに，幼稚園が休園の時にウサギのハイのいのちをつなぐ継続飼育を家庭へと呼びかけ，保護者がウサギをホームステイする経験は，育児支援になることや，ある保護者の作った「ハイの世話のしかた」という日記が，ハイへの愛情とともに親の主体性を育み人の心もつないでいくことを実践から学んだ。

キーワード：ウサギ，いのち，継続飼育，ストーリー，育児支援

Ⅰ．はじめに

誕生して自分で餌を食べるようになったばかりのウサギ 2 羽を他園からもらって飼育する生活が 2007 年 9 月から 5 歳児のこどもと共に始まった。育てる中で，そのウサギがこどもと共に暮らす仲間になっていった。2 羽のウサギが雌と雄であることが分かり，別々に飼育サークルを作ったにもかかわらず, 赤ちゃんがこどもの手の内で誕生するというできごとに遭遇した。

そして，命を繋ぐために，休園日には保育者の家からこどもの家へとウサギのホームステイが始まった。週末ごとに自宅に連れて帰る家族の中には，こども以上におとなの方が愛着をもち父親の可愛がりように母親が目を細めて語る姿も見られた。5 歳児の修了と共に誕生した子ウサギは 1 羽（ハイと命名）を幼稚園に残し, 好きなこどもの家庭へともらわれて行った。親ウサギは,

1）京都教育大学附属幼稚園

2008 ～ 2009 年度の 5 歳児に，1 羽の子ウサギの飼育は，誕生に立ち会った保育者のもとで 2008 年度は 3 歳児，2009-2011 年度は 4 歳児に引き継がれた。子ウサギとの出会い，自分たちの仲間となるウサギ，大きくなったウサギの出産，新たな命の誕生，親ウサギの死といった，命の生成・つながりをめぐる出来事（ストーリー）のなかで，こどもは，期待に弾む心，親しみ，愛着，驚き，慈しみ，喜び，心配，不安，悲しみといった様々な感情のうねりや情緒的な体験を豊かにしている様子が，エピソードからもうかがい知ることができた。そのような情緒的な体験は，「心情・意欲・態度」を育む幼児教育にとって大切になることはいうまでもない。それだけではない。この「ウサギ物語」のなかで，ウサギは耳が細い，ふわふわしている，どんな食べ物を食べるか，どんなウンチをするか，抱くと（心臓が）ドキドキしている，出産前には普通と違う様子や鳴き声をしている，どんな風に赤ちゃんが生まれるか，やがて死ぬ，といった一連の体験を通して，生命に関しての認識も深まっていく様子もうかがえた（鍋島・高野・光村 2010）。

近年，親が育児を放棄したり，子どもへの体罰などの虐待で幼い命を奪ってしまったりする事件が起こっている。この背景には，親になることや，育てることの不安感を助長するような社会環境や社会情勢のさまざまな変化をあげることができる。私たちの園に通う子どもの家庭を鑑みると，核家族も多く，マンション住まいであったり，周囲に安全に遊べる環境が乏しかったりする。また，知的な早期教育への期待が強く習い事で時間を費やしたりして孤立している家族や，子どもをスケジュール通りに管理している家庭も多くみられる。つまり，直接体験や主体的に遊ぶ経験が非常に希薄になっていることが事実である。その直接体験の中の一つとして，生き物を家庭内で飼育する環境もこの頃は少ない。その一つの原因としては，さまざまな情報にとらわれて，家族の健康にまつわる誤った除菌志向があることを強く感じる。そこで，私たちは，子どもがウサギの飼育を通してさまざまな貴重な体験をしていることを家庭へも繋いでいきたいと考えた。そして，子ウサギ「ハイ」のホームステイを積極的に試みた。

ここでは，そのホームステイを通しての継続飼育に焦点化し，つながる命と共に育ちあうこどもとおとなの貴重な体験を，「ウサギのホームステイにまつわる物語」として語ってみたいと考える。

Ⅱ．方　法

ホームステイにおいてウサギの飼育に関わったこども・保護者とウサギを送り出す保育者の有り様を①時系列に沿ってエピソード記録を収集する，②そのエピソードを幼稚園教育要領の 5 領域からみとる，③さらに，ホームステイを通してこども・保育者・保護者が味わった感情体験がどのように行動や言葉に表れているのか，保護者の日記や語りからも観ていく。このエピソードは，保育者が記録したものであり，前述した②③の観点がその中に埋め込まれている。観察者が記録するエピソードとは違い保育者の主観性が高いと考えるが，その点は，一緒に実践をしてきた保育者同士それらのエピソードを読み解き検討した。

観察期間　2008 年 7 月～ 2011 年 12 月

観察場所　幼稚園

Ⅲ．実践の経過

1. ハイの“お母さん”になる

2008 年 2 月 14 日，年長児で世話していたウサギのクロとシロの間に赤ちゃんハイが誕生した。その 4 月から私（光村）と共に年少組で生活することになったハイだが，まだ小さかったため週末の世話は保育者が家に連れて帰っていた。夏休みが始まる頃にはハイも 0 歳 5 ヶ月になり体つきもしっかりしてきたので，子どもや保護者にも言葉を話さない動物とのより深いかかわりやそこから生まれる愛情，そしてみんなで命を繋ぐことの大切さを経験してほしいと願い，ホームステイへの協力を呼びかけていった。

（1）ホームステイを始めて１－２年目

エピソード 1　心配しつつ送り出す　2008/07~08

ハイの初めてのホームステイとなる夏休み。私「シートが〇枚で，タオルでしょう？おしっこちゃんとできるかなぁ？迷惑かけへんかなぁ？」と独り言を言いながら準備をしていると，保護者「我が子をお泊りに出すみたいですね」と笑われる。

エピソード 2　ハイの夏休み　2009/07/16

夏休みに入る前に，子どもたちにハイの夏休みについてどうするのか投げかけてみた。夏休みの間もハイへの思いがつながるように，と子どもが幼稚園に来ない間，ご飯がなくてお腹が減ったり，掃除してもらえなくていやだと思ったり，一人で寂しかったりすることを子どもたちの感情と重ねながら伝えていった。それと共に，一緒に家に連れて帰って世話したり遊んだりする方法があることも伝え，やってみたい子どもに家の人と相談してもらった。

エピソード 3　夏休みのホームステイを迎える前に　2009/07/19

2 年生ケン（ハイの兄弟チョコを家庭で飼育）の母に「今年もホームステイに出されるんでしょうか？チョコを散髪に連れて行った時に覚えたので，ハイもお手入れしましょうか？」と散髪をしていただけることになる。イチョウの木陰に場をつくり，散髪を教えてもらったり，ハイやチョコの近況を話したりしながら，変わらずハイやチョコを可愛く思ってくださる気持ちを嬉しく思い，楽しい時間を過ごした。私「ハイ，よかったねぇ，気持ちよくなったね」とケンの母と共に喜ぶ。

2. 日記を通して広がる楽しみ

（1）思わず日記に記した“楽しさ”

エピソード 4　ハイの冬休み　2009/12~2010/01

マサトの母が「下の子が大きくなったからもう大丈夫です！」とホームステイに協力してもらえる。そして，預かる次の方も心配だろうから，と自らノートに世話の仕方をまとめて書いてこられた。そのノートは写真付きの日記になっており，マサト・イズミ・ハイ 3 兄妹の育児日記のようだった（図 1）。親子でハイとの生活を楽しんでられる姿が浮かび，いい時間を過ごされたことを嬉しく思った。

図１　ハイの世話のしかた

エピソード５　ハイのお正月　2009/12/31~2010/1/01

新しい年を迎えるため，私たちと同じように身なりを整えてもらえるよう，普段のホームステイセットにブラシとシャンプーをつけて預けることにする。サトシの家での大晦日，夕方にシャンプーをしてもらうが嫌がっていたとのこと，申し訳なく思うが気持ちよく引き受けてくださったことに感謝。マサト親子の日記を見て感動されたサトシの母も『ハイちゃん日記　T 家（図 2)』と題し，毎日のハイの様子や思いを写真つきで綴ってこられた。家庭でハイと過ごすことの楽しみが日記を通してもつながっていく予期せぬことに感動した。

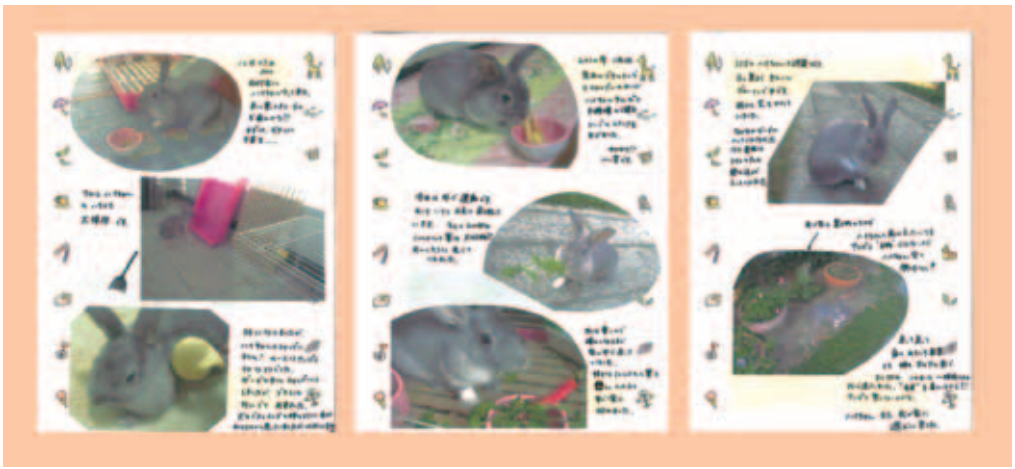

図２　ハイちゃん日記　T 家

(2) 引き継がれる楽しさ

ハイとの生活が始まって 3 年目の 2010 年 4 月，ハイと私は新しい年中児の子どもたちと出会うことになる。新しく出会った保護者の方々にも週末や長い休みの間の世話について協力を呼びかけ, ホームステイを希望する日に名前を記入してもらう『ホームステイ日程表（写真 1)』

の看板をハイのサークルの近くに立てて出しておくことにした。また，ホームステイのイメージが湧きやすく，その楽しさが同じ保護者の立場から伝わり興味をもってもらえるように，と看板の下に家庭での世話の仕方を書いたものや今までのホームステイの日記を並べて置いておくことにした。

写真１　ホームステイ日程表

エピソード６　“ハイちゃんマジック”　2010/10/22~25

１学期からハイに家に来てほしかったハルコ。母もホームステイに協力したい気持ちやマサト親子の日記を見てハイを家に迎えたい気持ちはあったが，４月に生まれたばかりの妹がいたため迷っておられた。が，９月に入り，ハルコが「赤ちゃんばっかり…」と寂しい思いをしていたり，幼稚園の“教育プラザ（おとなの教養講座：子育て・親育ちの講座）”の講師として招聘した獣医師の中川美穂子先生 の講演を機に母の考えが変わったりしてホームステイを引き受けてもらえることになった。ホームステイの後，ハルコの「ハイちゃんは私が！と張り切る姿（ハイが掛けた魔法, という意味で“ハイちゃんマジック”と言われていた）が嬉しかった」と語る母の姿も生き生きしていた。また，母「うちの日記みたいで恥ずかしいので，先生だけで見てくださいね」とハイとの生活や母の我が子への思いや心の中での語りかけが書かれた日記を持って来られた。

ハイを幼稚園に連れて来る朝，父「またハイちゃん貸してもらったら？」の言葉でハルコに「『貸してもらう』と違うやろ！！」と怒られたとのこと，その出来事を楽しげに語る母の姿と共にハイを心あるものとして捉えるハルコの気持ちを嬉しく思った。

3. 楽しさから愛情へ

（1）“私（母親）”がハイにしてやれること

エピソード７　ハイの冬休み２　2010/12~2011/01

冬休みのハイのホームステイ先の予定表を年長児のマサト･ルコの母が気にかけて見ている。そして，年中児ではなかなかホームステイの引き受け手がないことがわかると，「ハイちゃん，かわいそうに…」「私たちでもいいですか？」と名乗り出てくれる。そこへサトシ（年長児）の母も加わり，今年の冬休みも子どもたちの家で命を繋ぐことができる。

エピソード 8　なわばり意識ってすごい　2010/12/24~28

ルコの家ではウメ（今年 4 月，中川先生を通じて名古屋の小学校から譲り受けたウサギ，年長児と共に過ごす）の匂いの付いている場で必ずハイがうんちをしていたと聞く。私「迷惑かけましたね，ごめんなさい…」「これ！ハイちゃん！」と謝ったり叱ったりしながら，自分の家でもパンタ（ウメの兄弟, 同じく今年 4 月にハイの友だちとして新幹線に乗ってやってくる，年中児でハイと共に過ごすが 8 月に死去）のいた場で必ずおしっこしていたことを話し，互いに「なわばり意識ってすごいんですね，やっぱり動物なんですね」と飼われているハイにも野生の血が流れていることを「おぉ～…」と再認識した。

クリスマスを挟んでいたことで，ブーツをケージの中に飾ってもらったり，そこに立派な葉のついたニンジンのプレゼントが届いたりしたそうで, 母の話を聞きながら私「よかったねぇ，ハイ，ありがとうやなぁ…」と子どもと一緒にクリスマスも楽しく過ごしてくださったことをハイと共に感謝する。毎日のトピックを 1 枚の写真と母の言葉で綴った日記も届く。また後日，幼稚園のホームステイセットのひとつだったエサ入れのカップの裏に『HAICHAN』と名前まで入れてもらっていたことに気づく。

エピソード 9　ハイのお正月 2　2010/12/28~2011/01

今年もサトシ宅で年越しを迎えることになったハイ。昨年はシャンプー（ムースタイプ）を嫌がり，元旦まで機嫌が悪かったとのことだったので，今年は体を拭くウェットティッシュタイプのシャンプーをホームステイセットに付けてお渡しする。母も昨年のことを思い出しながら母「今年はこうしてみました」とハイの負担にならないような拭き方を工夫してくれる。

エピソード 10　ホームステイの輪その 1　2011/01/31

ルコが，週末連れ帰っていたウメと共に登園してくる。折りたたんだケージとトイレなどのお世話セットがそれぞれルコの母手作りの大きなバッグに入っている。子どもの絵本袋のように愛情のこもったバッグ。母「先生，どう！？」私「すごーい！かわいい！」とホームステイに携わる者同士で喜び合う。より連れ帰りやすいように，より多く人に連れて帰ってもらえるように，との心遣いに感謝。

エピソード 11　ホームステイの輪 2　2011/02

今度はハイを連れて帰ってくれたルコ（年長児）だが，帰って来る時にウメと同じく大きな手作りバッグに入って帰ってくる。荷物を持ってきてくれたルコに私「え～！これ，ハイちゃんのも作ってくれはったん！？（写真 2)」と尋ねると，母「これはハイちゃんの，先生，遅くなってごめんね」と声をかけてくれる。ポケットにはハイ色のフェルトで作ったハイのマスコットが付いていている。私「嬉しいです！ハイも付けてくれはったんですね，ありがとうございます～！」とその可愛さと，自分の得意なこととはいえそこまでの時間と愛情を掛けてくださっていることに感動する。

写真２　手作りのハイのホームスティバック

エピソード 12　ハイの春休み　2011/03/18~04/11

春休みには「進学する前に是非…」と修了を迎えたノノコやタロウも加わり，4 月に連れて帰ってくれる予定だったジロウ（年中児）へと繋いでくださる。

（2）就学前の春休み　－ハイとの別れ－

エピソード 13　手紙　2011/03/26

年中組の頃には私と一緒にハイの世話をすることで安心したり，家にもよく連れて帰ってくれたりしていたノノコは年長組になってウメと出会い，ウメのホームステイに協力してくれていた。最後にハイと過ごせることになってとても喜んでいる。ホームステイ最終日，ハイを園に連れてきた時に母から手紙をいただく。そこにはハイの姿と一緒に，ノノコの修了式後の不安定な様子と，ハイが来て気持ちが落ち着いてきたこと，ホームステイできた喜びやお礼が書かれていた。手紙に添えられていた写真には，ノノコの家で体を伸ばしてくつろぐハイや小さなウサギの人形に囲まれたハイの姿が写っていた。慣れない場所や人の前ではそんな姿は見せないハイ。2 年間，愛情を注いでくださったことがひしひしと伝わり，温かい気持ちになった。現在の保育室にもその写真を飾り，「ハイちゃん長いなぁ」，「これ，ハイちゃんの赤ちゃん？」，私「これはね，ノノコちゃんっていう小学校の 1 年生のお姉ちゃんの家で撮った写真なんよ，ハイちゃん優しい顔してるでしょう？」など園ではなかなか見られないハイの姿を嬉しそうに見る子どもたちと一緒に話すことを楽しんでいる。

エピソード 14　ハイちゃんお疲れやと思います（！？）2011/03/26~28

タロウの家から直接ルコの家へホームステイの引き継ぎがあったためタロウたちと話をする機会がなかったが，偶然母と道で出会い立ち話をする。母「先生，すいません，たぶんハイちゃんお疲れやと思います…」とのこと，私「えっ…」とドキドキしながらも「大丈夫ですよ」と落ち着いて応える。その後『ハイとタロウとそのきょうだいの 3 日ものがたり（図 3)』という日記が届き，母の言葉の意味がわかる。小学校へ入学する 4 月からは犬を飼う予定だったタロウの家では，母「あんまり可愛くて離れたくないって言うから…」とウサギを飼うことになったと聞いた。

図３　ハイとタロウとそのきょうだいの３日ものがたり

4. ホームスティを新たに募る　３年目

ハイとの生活 4 年目の 2011 年 4 月，私とハイは再び新しい年中児の子どもや保護者との出会いの時を迎える。昨年度と同様にホームステイの協力を呼びかけると，預かってみたいといくつかの家庭から積極的に声がかかり嬉しく思う。しかし，その中でも母親の出産や違う生き物を飼い始めたり，ウサギのアレルギーがわかるなど様々な事情で預かってもらいにくくなり，週末は保育者が連れて帰ることが多くなった。

（1）預かる楽しみと不安

エピソード 15　ネコがいるんですけど…　2011/09/22~27

年長児に教えてもらいながらハイの世話を覚えていったヨシコ。私も連れて帰れず，どうしょうか困っていた 4 連休に母「うち，ネコがいるんですけど，もし大丈夫やったら連れて帰りますよ」と声をかけてくださる。私「イヌとは大丈夫やったので，たぶん大丈夫やと思うのやけど，どうでしょうねぇ…」母「一緒にしなかったら大丈夫ですかね？」私「マオちゃん（ネコの名前，家庭訪問で見る）やったら大丈夫そうですよねぇ」母「たぶん何にもしないと思うんですけど，玄関にケージ置いたら大丈夫だと思います」など相談し預かってもらうことに。初めてのホームステイで，命あるものを預かるという責任感からか少し緊張気味の母。世話の仕方もきちんと書いてあるマサトの楽しい日記を一緒に持って帰ってもらう。

再び連れてきてもらった時も，一緒に過ごせて楽しかった～という気持ちや無事に預かれてよかった～という安堵感よりも，「先生，荷物これだけだったと思います」と借りた荷物がきちんとそろって返せているかや「やっぱり玄関にケージ置いたんです，たぶん大丈夫だと思います」と後々ハイがストレスから体調を崩さないか，という様子でまだまだ緊張の母を私「ハ

イ，おかえり。お母さん，大丈夫です！ありがとうございました！」と明るく声を掛けて受け止めた。

エピソード16　“やわうん”　2011/11

夏休みにホームステイで連れて帰ってくれたカヨコの母が，ハイの足の怪我を心配して保育室まで様子を見に来てくださる。母「ハイちゃん，足どうですか？」私「ありがとうございます，おかげさまでもうほとんど治ったみたいです。土もちゃんと掘ってますから！」母「あぁ，よかった！（ハイに向かって）ハイちゃん！」私「（ハイに）ありがとう，やなぁ」カヨコ「あ，“やわうん”」母「ほんと，“やわうん”やなぁ」私「（二人の視線の先を見て）あ，やわらかいうんちのこと？」母「そうなんです，家でそう言っててんね」カヨコ「うん」母「でも先生，ハイちゃんの“やわうん”の時間ってだいたい決まってますよね？いっかいしたら，次から普通のうんちになるんですよね」私「確かにそうですよね！それがずっと続くと心配ですけど，すぐいいうんちになりますよね！」，ハイに向かって「この頃ちゃんと草食べるからね（固形のエサだけでなく，干し草を食べることでお腹の調子が整い，大きないいうんちが出るため），えらいえらい」母「（ハイに）ハイちゃん，じゃあまたね」私「ありがとうございました」母「いいえ」と嬉しそうに帰っていく。ハイの足や健康状態を心配したり世話をしたりしながらハイの姿をしっかり見てられる母の様子をカヨコも見ながら受け継いでいるように感じた。

エピソード17　僕とこ出かけるから…　2011/12/15

前日，ハイや小鳥たちの冬休みの過ごし方について子どもたちと相談をした。すると，この日は数人の子どもたちからホームステイの話題が聞かれた。シンジ「あんな，僕とこな，お正月は出かけるから預かれへんのやって。でもな，また普通の時やったらいいって」カツオ「カッちゃん，鳥連れて帰りたいねん！お母さん，お父さんに聞いていいって言わはったらいいって言うたはったし！また帰りお母さんに聞いてみて！」シロウ「シロウ，入院するまでやったらいいって言わはったし，ハイちゃん連れて帰るで」ネイタ「ネイはな，5階やし危ないしあかんねん（残念そうな顔で）…」ユキコ「ユッキーもマンションやしあかんねん」など，ハイや小鳥の休み中の預かりについて，家庭で子どもと一緒に考えてできることを相談している様子が子どもの語りからうかがい知ることができ嬉しかった。

（2）世話して感じる新たな発見

エピソード18　すのこの替えを…　2011/12/19

第2学期の終業式の降園時，冬休みのホームステイの予定をヨシコ・エイコ・カヨコの母で調整されている。話が済んだ後，3人から「先生，すのこをもう1枚入れておいてもらえませんか？」と言われる。夏は洗ってもすぐ乾くので大丈夫だったが，冬はなかなか乾かないので予備のものが欲しい，とのこと。すのこをきちんと洗ってもらっているとは思わなかったので，その丁寧さに驚く。同時に，よりよいホームステイ生活を送るために，今まで通りだけでなく体験から感じたことを保護者同士で話し合ったり，きちんと保育者に伝えたりと，自分たちが主体的にかかわっていこうとする姿を頼もしく思った。

エピソード19　なつくんですね～　2011/12/22

幼稚園にやってきたサンタクロースからのハイへのプレゼントはお腹のあたりで抱っこできる“抱っこバッグ”だった。早速私も使わせてもらい，抱っこするとハイもおとなしく入って

いる。ところが，ヨシコの母が抱っこして連れて帰ろうとした途端にバッグから逃げ出し，「いやだ～！」と言わんばかりに必死で私の体にべったりとくっついてくる。それを見た母の顔が満面の笑みになり「ウサギもなつくんですね～」とのこと。人見知りの赤ちゃんが母親から違う人に抱っこされる時に嫌がって母親を求めるような場面だった。ヨシコの母も心からハイを可愛いと感じ，ハイには“命”だけでなく私たちと同じく“情”もあるのか…とより身近に感じられた様子だった。

エピソード 20　あとちょっと！　2011/12/26

ハイを園まで連れてきたヨシコの母。ハイが私に引っ付く姿がよほど印象的だった様子で，2 度目のホームステイだったので「ケージの戸を開けると自分から出てうろうろするんです！」「ハイちゃん，って呼んだらちゃんと来るんですね」「膝とかにも乗ってきますか？」「膝まではくるんですけど，触ろうと思うと行ってしまうんです，あとちょっと！なんですけど…」ととても嬉しそうな顔で話をする。緊張して預かってもらった 1 度目とはすっかり変わり，たくさん伝えたいことがあるといった様子で話をされていて，聞いている私も嬉しくなった。

（3）ある母親の変容

エピソード 21　同じ立場に立って　2010/12/17

ジロウの母が中川先生の講演で感じられたことを家に持ち帰り，ジロウにもハイとの触れ合いを通していろいろなことを感じてほしい，と父と相談してホームステイを受けることになった。友だちが世話をする様子は見たことはあったジロウだが実際やってみると思っていたようにはいかず，ジロウを頼りにしていた母もわからないまま一緒に世話を始める。「初めて母子で喧嘩をしました」との報告に，ハイの飼育を通じて母子がハイのためにと言う同じ願いから，正直な思いを出し合えたことを嬉しく感じた。

後日，ホームステイでの世話の様子を写真と文にしてノートを作ってこられたので花梨グループで集った際に子どもたちと一緒に見させていただいた。子どもたちが喜んで見ていた様子やジロウの照れくさそうにしながらも誇らしく頷く姿を母に伝えると，母「カメラが壊れて途中で終わってしまったんです…，今度はちゃんと書いてきます」と感情が表情に出にくかった母も，このときは心のままに恥ずかしそうに笑う。

エピソード 22　ジロウ宅にて　2011/06~

ハイは年中児で引き続き世話をしていくことになったがなかなかホームステイ先が決まらず，年長児になったジロウが何度か連れて帰るようになる。母は毎日の世話を通してジロウにいろいろ感じて欲しい，と思ってらした様子だったが，ハイがトイレの掃除をしている間に違う場所でおしっこしたり，下痢になったり，怒ったり，痛がったり，散歩に行っても動かなかったり…と思いもよらない事件を起こすことで，次第に母も一緒に驚いたり心配したり困ったりしていくことになる。そんな中で母に口ごたえをしたことのなかったジロウが初めて駄々をこねたと喜んだり，ふたりの失敗談を笑って話したり，と母の表情がだんだん明るくなっていった。

（4）父親も一緒に

以前，ハイの父親であるシロを預かっていただいていた家庭の母親が，父親がシロに赤ちゃん言葉で話しかけるという「普段家族に見せない姿が見れました」と嬉しそうに話してくださっ

たことがあった。そんな温かい空気が家庭に流れることを願って…。

エピソード23　念願のホームステイ　2010/01/25

3歳児の頃からハイを可愛がり家にも連れて帰りたがっていたが，登降園時はまだ小さい双子の弟妹に母が手一杯だったためハイやホームステイの荷物を持ち帰ることが難しくなかなかホームステイできなかったヨシコ。しかし日曜参観で父親と二人きりで降園する日にやっと連れて帰ることができる。日曜参観のアンケートには父親から『ハイちゃんと楽しく過ごせました。ありがとうございました。』との言葉が添えられていた。

エピソード24　日曜参観で再会　2011/06/05

一度ホームステイで連れて帰ったことのあるヨシキ。日曜参観のこの日もいつもと同じようにハイのケージに顔を突っ込んで餌をやったりなでたりしている。その後ろで父もしゃがんでにこやかに見つめている。私「この間は連れて帰っていただいてありがとうございました」と父に声をかけると，父「いいえ，可愛いですねぇ」と目を細められる。私「ほんと，可愛いですよねぇ」と一緒にハイを見つめ気持ちを共にしながら，家庭でも父が可愛いがってくれたことがわかり嬉しく思った。

（5）日記が繋ぐ人の和

2010年の春休みにある家庭でつけてくださった「ハイの世話のしかた」のホームスティ日記を目にした家族がさらに自分たちの世話を日記にして見たり，世話が分からず，手作りのその日記が頼りどころになったりと年度を超えた保護者のつながりをつくり始めていることが分かった。

エピソード25　あの日記の子だ！　2011/12/09

ジロウを迎えに来る途中，下校する小学生とすれ違ったジロウの母。その中に1年生のマサトの姿を見つける。母「あ！あの日記の子だ！って思って声かけたんです」と嬉しそうに私に教えてくださる。母「ハイちゃんの背中があんな色になってびっくりした～，って言ってました。可愛がってたらそんなことまで気がつくんだぁ，と思って…」私「そんなこと言うてましたか。実は今日ね，梅組と桜組の子どもたち（年長児）に学芸会の招待状を持ってきてくれて，その後ちょっと遊んで帰ったんですよ。その時にハイとも出会ったんやね，ほんとによう気がついたね」母と私「すごいですね～」と感心する。卒園後のマサトに実際に出会い“生の”声を聞いたことで，マサトがどれだけハイを大切に思ってきたかを実感されたように思う。また，“その気持ちはちゃんとジロウと母が継いでいくからね，頑張るね”という決心と“こんな子どもになってほしいな”という母の期待が感じられた。

エピソード26　ミミちゃん　2011/12/26

エイタの家に向かう準備の途中，トモ（小学校4年生，ハイの兄弟を引き取りミミと名付け育てている）とトモの母に出会う。ケージにいるハイを見て母「あ！元気にしてますね～！うちのもまだいますよ！」と嬉しそうに話してくださる。私「ミミちゃんやね！？歯をいつも気にしてもらってるみたいで…（歯が斜めに生えているので伸びたら定期的に病院で削ってもらわないとエサが食べられない，と以前トモに聞いていた）」母「そうなんですよ，もう死にそうですけど…」私「え！！なんでですか！？」母「いや，太りすぎ…」私「あら～，そういえばトモちゃんも前に言うたはりました」母「あはは…」と笑う。ミミちゃんが“幼稚園のウサ

ギの兄弟”から，もうすっかり“うちの子”になっているのだなぁと感じた。また，ずいぶんお姉さんになったトモの姿や私たちの様子を見ながら，ハイがどんなに長い間たくさんの子どもや大人に可愛がられてきたか，エイタ母子も感じてくれればと思う。

Ⅳ．考　察

本稿では，ウサギのホームステイを通してこども，保育者，保護者がともに生活を営んできたなかでの体験を，エピソードを通して「ホームステイ物語」として語ってみた。

まず，そのなかでそれぞれの親（家族）にとって「ホームステイ物語」から見えてきたものをいくつかの観点から述べてみたい。

1. ホームステイをした親の思い

・可愛いと思って預かる家庭，子どもの育ちのためにと預かる家庭，いのちを繋ぐために預かる家庭などホームステイを始めるきっかけは様々であることが読み取れる。が，その根底にあるのは，我が子を思う親心であることが分かる。なぜなら，園から家庭まで子ども同伴で体重 2kg もあるウサギのハイを連れて，さらに飼育に必要な折りたたんだ飼育ケースと餌等々を徒歩で，あるいは電車で連れて帰っていく労を惜しまないからである。

・家庭で身近に世話が始まると，子ども同様にウサギの仕草や習性に興味と関心を向けていく様子が，それぞれの母親自作の日記や語りからわかる。さらに，家庭では見せたことのない我が子のハイへの関わりや思いに触れ，子どもの成長を感じている。そのことも親のかけがえのない喜びとなっている様子が分かる。

2. ホームステイを通して育まれる親の主体性

・A4 を二つ折りにしたサイズの家庭にあったとみられる自由帳に「次の人が困らないように」との思いから作成された『ハイの世話のしかた（図 1）』に続いて綴られた我が子が妹と一緒にハイと遊んだり世話をしたりしている様子の写真付きのホームステイ日記は，実に楽しさとほのぼのさが伝わってくる。それを，保育者が次からのホームステイ先に添えた配慮が，次の母親が自分の目からハイを主人公にした日記（図 2）を綴ることへとつながっている。さらに，その年度を超えて日記は利用され，刺激となり目に触れられ次の年度の親へ引き継がれていくことが分かる。

・教師が今までにしてきた，クリスマスや正月を迎えるハイへの思いを，保育を通して体験している子どもが，家庭で親へと伝えたり，親が保育者から伝え聞いたことを実現したりという家庭と園との連携や，保育者と保護者の信頼関係が築かれていく様子が分かる。そのことが，お土産や袋の作成（写真 1）という親ならではの心遣いが無理の無い範囲で素直に表現されている。

・2008-2009 年度との持ち上がりの子どもの母親から，2010 年度のホームステイ先を探している保育者に，自らが積極的にその先を探したり引き受けようとしたりと動き出している。

これらの行為は，まさに親の主体性を育んでいると言えるであろう。

3. ホームステイに送り出す保育者の思い

・保育者は，ウサギの夜行性という習性を知っており，夜に起きているのが普通だという思いがあるものの，預かる保護者から，夜の物音に“大丈夫か”と，その都度起きたとの話を聞き申し訳なく思っている。逆に，保育者自身が，自宅へ連れて帰っている日は“傍にいる”ということで安心に思い眠りにつき，幼稚園に置いて帰っている日や子どもの家に預けている日は“寒い思いしてへんかなぁ？”“お腹こわしてへんかなぁ？”“可愛がってもらってるかなぁ？”“迷惑かけてへんかなぁ？”など心配になっている。このような保育者の育ての心は，日々の保育の中でのハイを飼育する自然な振る舞いのなかに立ち上がっているはずである。そばで一緒に飼育する子どもにもその姿勢はつながっていることが家庭での世話の仕様や親の手記からうかがい知ることができる。

Ⅴ．おわりに

継続飼育は，「命の大切さ（生命尊重），愛する心（情愛）や人を思いやる心を養い，動物への興味を培う（中川，2011）」と言われる。そのことは，科学する心を育むことにもなる。飼育するなかで起こるいろいろなハプニングへの対応は，工夫や洞察力，つまり生きる力を育むことにも繋がっていく。さらに，今回の実践から継続する飼育のいのちは，人と人とのネットワークも育んでいると言える。ウサギの飼育の保育を経験した子どもが家庭へと繋ぎ，親は個人的な飼育日記（記録）を通して次の親へと繋がっていく。その子どもと保護者たちが，ウサギと保育者との情緒的な深いつながりを受けついで今もホームステイを楽しんでいる。

参考文献・引用文献

岩田純一（2001）「＜わたし＞の発達」ミネルヴァ書房.

岡本夏木（2005）「幼児期」岩波新書.

中川美穂子（2007）「〈相手の感情と身体〉を理解する脳をつくる」文部科学時報 pp.51-55.

中川美穂子（2007）「小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 4:53-65.

中川美穂子（2011）教育プラザにての講演より.

無藤隆（2009）「幼児教育の原則」ミネルヴァ書房.

鍋島恵美，高野史朗，光村智香子（2010）「ウサギと共に暮らす日々のできごとから学ぶ－ウサギの飼育の保育を通して－」京都教育大学環境教育研究年報第 18 号 pp.1-24.

鍋島恵美，光村智香子（2011）「ウサギと共に暮らす日々のできごとから学ぶ－ウサギの飼育の保育を通して　その２－」京都教育大学環境教育研究年報第 19 号 pp.13-26.